莎草研究 No. 23: 3−5 (2021).
J. Jpn. Cyperol. (23): 3−5 (2021).

【産地報告】

鹿児島県本土および下甑島のヤリテンツキ（カヤツリグサ科）

田村優希[1]・田金秀一郎[2]・矢野興一[1,*]
（[1]岡山理科大学大学院生物地球科学研究科 〒700-0005 岡山県岡山市北区理大町 1-1;
[2]鹿児島大学総合研究博物館 〒890-0065 鹿児島県鹿児島市郡元 1-21-30）

Yuki TAMURA[1], Shuichiro TAGANE[2] and Okihito YANO[1,*]: *Fimbristylis ovata* (Burm. f.) J. Kern (Cyperaceae) from the mainland and Shimo-koshiki-jima Island in Kagoshima Prefecture, Japan

([1]Graduate School of Biosphere-Geosphere Science, Okayama University of Science, Ridai-cho 1-1, Kita-ku, Okayama-shi, Okayama 700-0005, JAPAN; [2]The Kagoshima University Museum, Kagoshima University, Korimoto 1-21-30, Kagoshima-shi, Kagoshima 890-0065, JAPAN)
*Corresponding author: oki.yano@gmail.com

(2020 年 11 月 24 日　受理)

はじめに

ヤリテンツキ *Fimbristylis ovata* (Burm. f.) J. Kern（カヤツリグサ科）は、主に海岸沿いの日当たりのよい草地に生育する多年生草本である。ヤリテンツキは比較的まれな植物であり、環境省のレッドデータリスト 2020（環境省 2020）では「準絶滅危惧」、鹿児島県レッドデータブック 2016（鹿児島県環境林務部自然保護課 2016）でも「準絶滅危惧」とされている。

著者らは日本産ヤリテンツキの分布について、標本および文献情報に基づいて『莎草研究』22 号で報告した（田村・矢野 2020）。そのなかで鹿児島県のヤリテンツキについては、「南部の島嶼部には比較的多く現存しているが、鹿児島県本土では近年に採集された標本は見当たらず現存不明であると考えられる」としている。彼らが引用している標本のうち、鹿児島県本土産の最も新しいものは 1957 年に採集されたもので、以来 60 年以上標本が採集されていないことになる。また、同じ報告（田村・矢野 2020）で、「甑島や桜島からの標本についても今回確認できなかったので、要検討である」とも記している。

しかしその後、著者のひとり田金は、鹿児島県南さつま市で 2018 年に採集されたヤリテンツキの標本が鹿児島大学総合研究博物館植物標本室（KAG）に収蔵されていることを確認した。さらに、丸野勝敏氏（鹿児島大学総合研究博物館学外研究者）からは、ヤリテンツキが下甑島に生育しているとの情報も得た。

そこで、著者らは鹿児島県におけるヤリテンツキの現状を調べるため、2020 年 9 月に鹿児島県南さつま市と下甑島を訪れ、ヤリテンツキの自生を確認したので、ここに報告する。

生育地の状況

田金が確認した鹿児島県本土産ヤリテンツキ標本（S. Tagane & K. Maruno no. 527, KAG）は、2018 年 6 月に南さつま市大浦町の草地で採集されたものであった。著者らは 2020 年 9 月 9 日に、標本データに基づいて採集された場所を訪れたところ、東シナ海を見渡せる丘

陵地周辺の草地に約 70 株ほどが生育しているのを確認した（図 1A & B）。周辺には牧場もあり、草地が広がっており、カヤツリグサ科クグテンツキ *Fimbristylis dichotoma* (L.) Vahl var. *diphylla* (Retz.) T. Koyama やシンジュガヤ *Scleria levis* Retz.なども生育していた。しかし、周辺の草地では観光地化や火入れの取止めに伴って、草原性植物がかなりなくなっているという（丸野氏 私信）。また、今回確認できたヤリテンツキの自生地は、登山道の入口脇にあり（図 1B）、今後、観光地化に伴って登山道およびその周辺が整備されることにより、自生地が破壊されるおそれもある。

下甑島のヤリテンツキについては、2020 年 9 月 10 日に現地を訪れ、東シナ海に面した崖地斜面の草原にユリ科カノコユリ *Lilium speciosum* Thunb.やススキノキ科ニシノハマカンゾウ *Hemerocallis fulva* L. var. *aurantiaca* (Baker) M. Hotta とともに多数点在して生育しているのを確認した（図 1C）。ここはカノコユリの群生地として近年になって半観光地化されたところで、もともと海岸風衝草原であることに加え、カノコユリの保全のために草原が維持・管理されており、この状況が続けばヤリテンツキも継続して安定的に生育できると思われる。

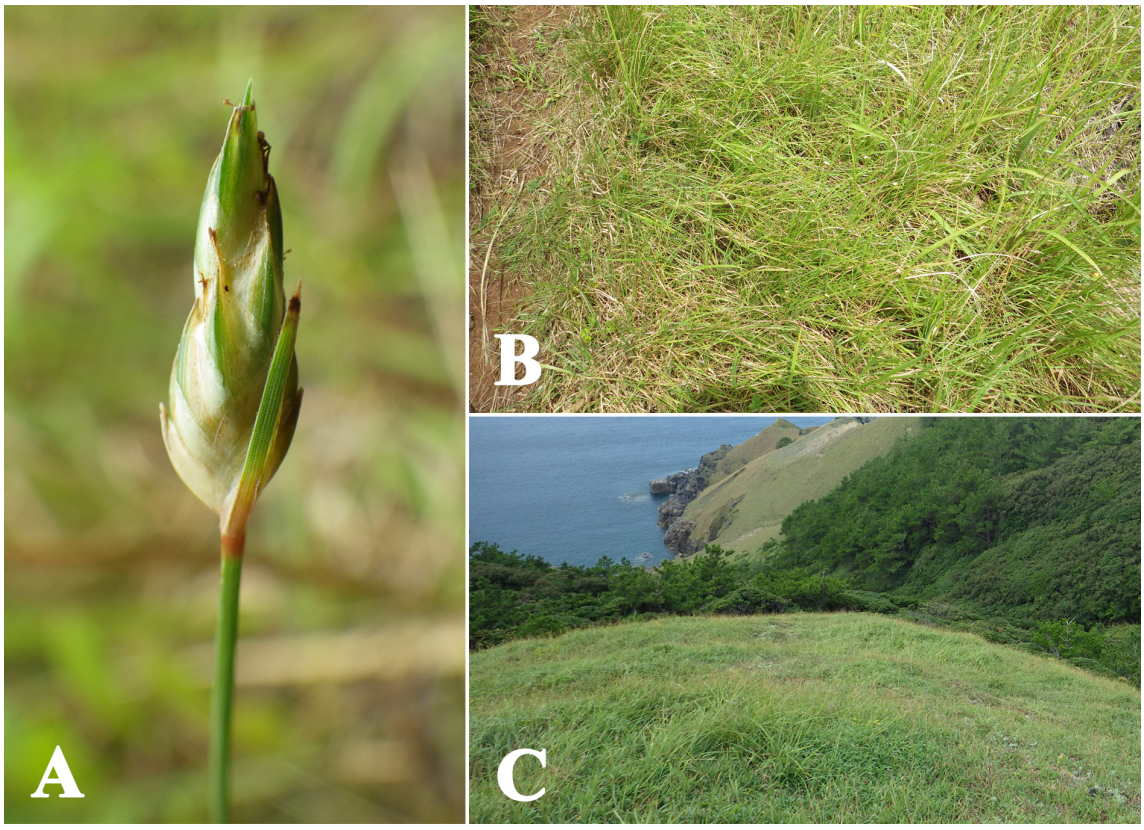

図 1. 鹿児島県南さつま市および下甑島のヤリテンツキ．**A:** ヤリテンツキの小穂．**B:** 南さつま市の自生地（2020 年 9 月 9 日撮影）．写真の左側には、土がむき出しになった登山道が見える．**C:** 下甑島の自生地（2020 年 9 月 10 日撮影）．

鹿児島県産ヤリテンツキについて、田村・矢野（2020）は、本土側から 14 点の標本を引用しているが、そのうち 1957 年 9 月に採集された標本（肝属郡南大隅町 (佐多), S. Hatusima no. 21194, MAK, KAG）が最も新しく、「鹿児島県本土では近年に採集された標本は見当た

らず現存不明であると考えられる」としている。また、同じく田村・矢野（2020）では、甑島で採集された標本は引用されておらず、「甑島や桜島からの標本についても今回確認できなかったので、要検討である」としている。したがって、今回採集・確認された標本は、鹿児島県本土産としてはおよそ 60 年ぶり、甑島産としては初めての報告となると考えられる。

鹿児島県レッドデータブック 2016（鹿児島県環境林務部自然保護課 2016）ではヤリテンツキは「準絶滅危惧」とされている。各地のレッドデータブック等では、50 年以上未確認の場合、「絶滅」と評価される（例えば 奈良県レッドデータブック改訂委員会 2017）ことから、ヤリテンツキは鹿児島県本土では絶滅と扱われるところであったが、今回の確認により、現在でも生育していることが確認された。また、甑島からはこれまで確実な標本がなかったことから、「現状不明」とされるところであったが、今回の確認により、甑島にもヤリテンツキが分布していることが標本によって裏付けされた。したがって、今回の確認は鹿児島県におけるヤリテンツキの保護・保全のための基礎データとして重要なものと考えられる。

証拠標本

ヤリテンツキは鹿児島県において準絶滅危惧種とされることから，詳細な地名は省略した。証拠標本は鹿児島大学総合研究博物館（KAG）または岡山理科大学植物標本庫（OKAY）に収蔵されている。

鹿児島県. 南さつま市大浦町 (S. Tagane & K. Maruno no. 527, 3 June 2018, KAG-122510); 同 (O. Yano, Y. Tamura & H. Yamamoto nos. 200909101−200909111, 9 Sep. 2020, OKAY); 薩摩川内市（下甑島）(O. Yano, Y. Tamura & H. Yamamoto nos. 200910201−200910214, 10 Sep. 2020, OKAY).

謝辞

丸野勝敏 氏（鹿児島大学）と山本博也 氏（岡山理科大学）には、情報提供および現地調査にご協力いただきました。記してお礼申し上げます。

参考文献

鹿児島県環境林務部自然保護課（編）2016. 改訂・鹿児島県の絶滅のおそれのある野生動植物 －鹿児島県レッドデータブック2016－ 植物編. 499 pp. 鹿児島県環境技術協会, 鹿児島.

環境省 2020. 環境省レッドリスト2020の公表について「別添資料3 環境省レッドリスト2020」（令和2年3月27日 環境省報道発表資料）（http://www.env.go.jp/press/files/jp/113667.pdf, 2020年4月1日閲覧）.

奈良県レッドデータブック改訂委員会（編）2017. 大切にしたい奈良県の野生動植物 －奈良県版レッドデータブック2016 改訂版－. 奈良県くらし創造部景観・環境局 景観・自然環境課，奈良.

田村優希・矢野興一 2020. 日本産ヤリテンツキ（カヤツリグサ科）の分布. 莎草研究 (22): 23−35.